

# 願い事

あれは、私が小学生の時。その日は七夕に近く、姉と一緒に願い事を書いていた。その時、姉が私に言った。「ゆみ、目が良くなりますようにって書いたら。」私はこう言った。「書かんよ！ だってもう良くならんもん。」

私は、あきらめていたのだ。自分の目がまだ良くなると思いつけ、期待していたら、そうならなかった時に一番悲しくなるのは自分だから。いつそのことあきらめていた方が楽だ。しかし数年後、私の視力は、何の前触れもなく、予想を超えて一気に低下してしまった。今まで見えていたきれいな風景は見えにくくなり、花も触らないと分からなくなった。どうしてこんなに早いのか？ 何で私なの？ そんな考えが頭の中をグルグル回った。

そんな自分を救ってくれたものがある。それは、サウンドテーブルテニス、視覚障がい者のための卓球だ。視力があってもなくても、感覚だけでできる。それが一つの希望になった。今は、私の左目はほとんど見えず、右目も裸眼で文字を読むことができなくなった。今日もちゃんと見えるだろうか。不安になる時がある。自分に負けそうになる時は、昨年愛媛県で開催された全国障害者スポーツ大会のことを思い出す。大会前は大きなプレッシャーを感じ、家に帰ると泣いていた。しかし、私は自分と闘った。あの時、二セット連取され、もう後がないという試合で、あきらめずに最後まで戦った。そして勝利した。試合が終わって、泣きながら笑った。あの時自分に勝ったのだから、きっと大丈夫。絶対に乗り越えられる。そう思えるようになる。

いつか完全に私の目が失明してしまい、悲しくて、苦しくても、私は見えていた記憶と一緒に、光と音の世界を生きていく。だから今は、できるだけ長く見えていたいと思うようになった。これからは私には、高い壁があると思う。しかし私はそれを乗り越えていきたい。乗り越えた壁は、自分にとって、今までとは違うものに見えているはずだから。